

プログラム・ノート

神保夏子

フルート、ハーブ、弦楽器。室内楽としてはやや珍しい、しかしいかにも魅惑的なこの楽器の組み合わせは、クロード・ドビュッシー(1862～1918)の晩年の傑作以来、近代フランスの様々な音楽家達を魅了してきたようだ。

プログラムの最初の2曲は、「パリ器楽五重奏団」という同一の合奏団に献呈されている。ハーブ、フルート、弦楽三重奏のための五重奏曲(1928)の作曲者ジャン・クラ(1879～1932)は、家庭の伝統により職業軍人の道を選んだが、生涯を通じて音楽創作に力を注ぎ、その優れた才能は師のアンリ・デュバルク(1848～1933)をして「私の精神的な息子」と言わしめたほどだった。全4楽章の作品だが、今回はその第1楽章のみが演奏される。

指揮者としても名高いガブリエル・ピエルネ(1863～1937)の『自由な変奏と終曲』作品51(1934)は、その名の通りやや変則的な形式をとった変奏曲。短い序奏の後、フルートで提示されるシチリアーナ風の冒頭主題は、拍子や曲想を変えながら融通無碍に変奏されていく。終曲はジーク風の軽快な音楽。曲の末尾では冒頭主題がもう一度回顧される。

タンゴの改革者として名高いアルゼンチンの音楽家アストル・ピアソラ(1921～92)もまた、フランスと無縁ではない。1954年のパリ留学の際、名教師ナディア・ブーランジェ(1887～1979)から受けた助言は、彼のタンゴ創作における「大きな啓示」となったという。『タンゴの歴史』(1985)は、1900年から同時代までのタンゴの歩みを4つの楽章にまとめたもので、第1楽章は「売春宿 1900」、第2楽章は「カフェ 1930」と題される。原曲はフルートとギターのための作品だが、今回取り上げられるのはカリ・ヴェフマネン(1967～)の編曲によるフルートとハーブのためのヴァージョンである。

ピアソラが師事したブーランジェの先生に当たるのが、フランス音楽の重鎮ガブリエル・フォーレ(1845～1924)だ。彼の数少ない管楽器のための作品の一つ、フルートとピアノのための幻想曲 作品79(1898)(今回はピアノ・パートをハーブで演奏)は、勤務先のパリ音楽院の学内コンクールの課題曲として作曲されたもので、同僚のフルート科教授ポール・タファネル(1844～1908)に献呈されている。

コンサートの最後を飾るのは、やはりブーランジェの弟子の一人であるジャン・フランセ(1912～97)のフルート、弦楽三重奏、ハーブのための五重奏曲第2番(1989)。1920年代のパリにタイムスリップしたかのようなその古典的で軽妙洒落な作風には、作曲者の敬愛したフランスの伝統が確かに息づいている。(じんぼう なつこ・音楽学)